

中国、台湾、日本の学術書ならびに一般書における 「客家」のイメージ形成過程の研究

A Study on the constructing process of Hakka images in academic and non-academic publications in Japan, Taiwan, and Mainland China

瀬川 昌久 (Masahisa SEGAWA)*

キーワード：客家、イメージ形成、エスニシティー、学術書・一般書
Keywords : Hakka Chinese, construction of images, ethnicity, academic and
non-academic publications

Abstract

Hakka studies were established by Luo Xianglin in the earliest stage of the history of anthropological and ethnological studies in China, and they have always been playing a leading role in the studies on Han-Chinese and its various subgroups. But owing to the fact that they were strongly motivated by Hakka intellectuals' interest in demonstrating Hakka's orthodoxy in its cultural and 'racial' sense, academic history of Hakka studies in later years has taken a very peculiar course throughout 20th century. A paradigm that Luo Xianglin had set up in 1930s has a long lasting effect on the researchers in succeeding generations, restricting their imagination and insights.

Past Hakka studies has been so strongly oriented to the demonstration of the orthodoxy of Hakka against other various subgroups of Han-Chinese that it is almost inevitable for them to fall into some important failures: 1) it sometimes prevented researchers from unprejudiced observation of Hakka's cultural traits; 2) it was inclined to exaggerate the uniqueness of Hakka as an ethnic group; 3) it often ignored or underestimated the continuity and interactions beyond the boundary between Hakka and Non-Han ethnic minorities in adjacent areas.

This nature of Hakka study has been contributed to construct the popular image of Hakka as a people with a strong pride of pure Han-Chinese, an ethnic group with many talented members, a reservoir of ancient Yellow River civilization, and a 'East Asian

* 東北大学東北アジア研究センター

Jewish' so on. These images were gradually accepted by ordinary people in Japan, as well as in Taiwan and Mainland China with various types of publications.

But, after 1980s there appeared some researchers in Japan who tried to overcome the old paradigm of Hakka studies, and this tendency has diffused into Mainland China in 1990s. It is from these new orientations in Japan and Mainland that many important breakthroughs came about (including my own works). In 2000s, we have already reached an accomplishment of a paradigm shift, and we are now witnessing a lot of new positive studies in this field such as the work of Iijima [飯島 2007] and that of Chai [蔡麟 2005].

Among these new Hakka studies, there included an reconsideration on the interaction and the boundary between Hakka and ethnic minorities, and it enables researchers on Hakka and those on ethnic minorities to cooperate for more inclusive understanding of culture and society of South China as well as of China as a whole. In this sense, Hakka studies has at last escaped from their pitfall and reached the point where they can be properly situated within, and integrated into, the whole structure of anthropological and ethnological studies in China.

1. はじめに

「客家」(ハッカ、Hakka)は、中国漢族の1サブグループとされる人々であり、彼らの話す言語とされている「客家語」は、漢語の中の主要方言のひとつとして数えられている。従って、その研究は広義の漢族研究の中に包摂されるべきものではあるが、これまでの学術研究ならびに一般書の中で、客家は漢族の単なる1方言集団としてではなく、その中でも著しく特異な文化、歴史、自己意識等をもった人々として描かれることが多かったために、その研究史自体が極めて独特の展開を遂げてきた。

中国の文化人類学・民族学研究は、20世紀前半の草創期以来、その学としてのまなざしが主として中国国内の自文化・自社会に向けられてきた点に特色がある。この点を日本の場合と比較してみれば、同じく非西洋社会であり、その近代化過程において西洋流のアカデミズムの一部として人類学・民族学研究が移植された点で共通しながら、興味深い好対照をなしている。日本の文化人類学者の第1世代と言ってよい岡正雄、馬淵東一らが、日本の基層文化のみならず中国周辺地域やオセアニア、東南アジアなど広く国外の諸社会を研究対象としていたのに対し、中国における第1世代研究者たる費孝通、林耀華らがいずれも中国国内の農村や周辺地域の少数民族のみを研究対象としていたことからそれは明らかである。

これは、両国の国土の大小、海外領や植民地の有無、内包する文化的・民族的多様性の

多寡などに起因する「国策」の相違や、知識人層の問題意識の違いによってある程度まで説明できるであろう。例えば上述の岡は、戦時体制下において「民族研究所」の長として中国北部の調査研究を押し進めたことで知られるし、馬淵の研究業績も、先行世代の移川子之藏の台湾原住民社会の研究などが出発点となっている。他方、国土が広大である中国では、凌純声や費孝通による北方、南方の少数民族の調査研究、費孝通や林耀華らの中国内地の漢族農村を対象とした調査研究など、国内のみでも人類学的・民族学的調査研究対象は尽きなかった反面、日中戦争期、国共内戦期と続く国内情勢の混乱から、中国人研究者が国外に赴いて本格的な調査を行うことは極めて困難なものとならざるを得なかった。

日中両国ともに、こうした第1世代の文化人類学者たちは欧米の人類学、民族学、社会学等の理論・方法論を学ぶことから出発しつつ、当時の国情の差、社会状況の相違により、すでにその当時から異なる方向性を内包していたと考えられる。そしてまた、そのような第1世代以来の傾向性の相違が、その後の長きにわたって両国の人類学・民族学の学問的発展の方向を規定し続けてきたことは否めない。

学問的まなざしが主として国内に向けられてきた中国においては、人類学・民族学はその初期以来大別して2つの下位分節へと分化してきた。ひとつは国内における他者研究とも言える少数民族研究であり、もうひとつは自文化・自社会研究としての性格がより一層濃厚な漢族研究である。前者は中国という国家社会の中に包摂された少数者の研究ならびにそれが保持する異文化を研究の対象とするものとして発展を遂げてきたが、やはりその主たる関心は、漢族が担っているオーソドックスな中国文化からのズレや、それへの同化の度合いに対して向けられてきた。他方、漢族研究の方は、父系出自や祭祖・婚姻儀礼、年中儀礼等に代表される中国文化のオーソドクシーが庶民に受容されている度合や、その地域的バリエーション、あるいはそれを伝播した祖先の移住史の再構成等に主たる関心が向けられてきた。

客家研究は後者の中のひときわ顕著なもののひとつであり、しかも、その多くが羅香林以来の研究蓄積の中で、客家出身者自身の手によってなされてきた。そして、漢族の中の精鋭部分としての自己意識とプライドに支えられつつ、その文化的、さらには「血統的」持続性を証明しようとしてきた点に特色がある。その点では、客家研究は中国の文化人類学・民族学研究の特殊性を最も濃縮した形で体现する存在であったとも言えよう。この客家研究の軌跡をたどり、中国本土、台湾、そして日本においてなされてきた諸言説の展開を客観的に跡づけることは、これまで客家研究を制約してきた諸々の偏向を超克することに寄与するのみならず、中国における文化・民族認識の特殊性を客体化し、われわれ中国研究者がそうした中国的知との間に適正な距離を保持しつつ中国を深く理解してゆくための、重要にして不可欠な作業であると考えられる。

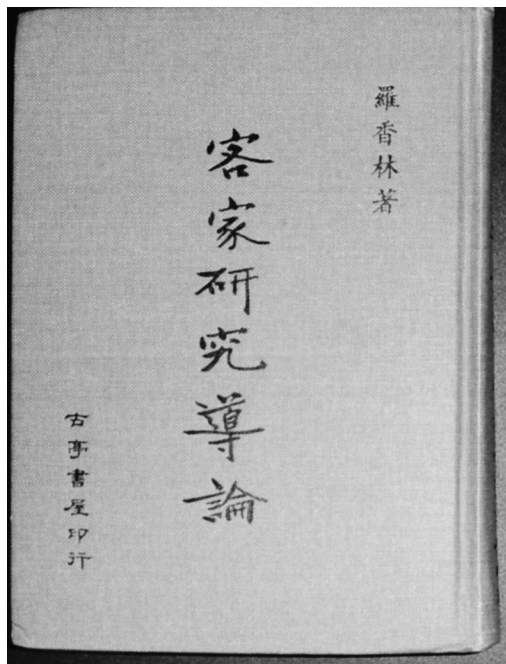
そこで、以下では羅香林以来の従来の客家研究における客家についての総説を批判的に跡づけ、客家特殊論的視座の限界性を総括した上で、近年に見られるその超克の方向性を見定めたい。

2. 客家特殊論の特徴

まず、従来の客家研究の中に記述されてきた一般的客家イメージというべきものを、整理しておく必要がある。

客家の居住地については、広東、福建、江西3省の省境部を中心とし、その周辺、および広西、四川、台湾、さらにシンガポール、マレーシアなど海外にも及んでいるとされている。また、客家の話す言語とされる「客家語」は、粵（広東）語、閩（福建）語、呉（上海、浙江）語、湘（湖南）語などとならぶ、中国南部の主要な方言のひとつに数えられ、その言語人口は、海外の者を含めて2,000万とも4,500万とも、あるいは1億以上とも言われている。客家についての解説書では、この客家語の言語人口をもって客家の総人口としている場合が多く見られる（注1）。

客家は、漢族の中の地方集団やサブグループの研究の中で非常に特異な地位を占めており、これまでの客家についての記述・分析においては、非常に高い頻度で客家の特殊性が強調されている。例えば「客家民系」の研究の創始者である羅香林（1906-1978）は、客家文化の特色として、古代中原の言語の系譜を引く客家語と、教育が盛んであることを挙げた上で、さらに客家の「特性」として、（1）家庭内で農業以外の副業を多く兼業し、商工行従事者として出稼ぎすることも多いこと、（2）女性の労働能力ならびに地位が高いこと、（3）勤勉で清潔好きであること、（4）行動的で野心家が多いこと、（5）冒険心に富み、進取の気性があること、（6）質素で儉約好きであること、（7）頑固で他人の言うことを聞かないことの7点を挙げている



羅香林の客家研究の原点となった『客家研究導論』（〔羅香林 1933〕）

を聞かないことの7点を挙げている [羅香林 1933 : 240-247]。

他方、日本で出版された一般向けの客家に関する紹介書の中でも、例えば高木桂蔵の『客家』という著書（講談社現代新書）は、「客家精神」の特徴として、(ア)強い団結心、(イ)進取、尚武の精神、(ウ)文化・伝統保持への自信、(エ)教育の重視、(オ)政治への高い指向性、(カ)女性の勤勉性を挙げている〔高木 1991：14〕。また、香港で出版された客家についての一般的な紹介書のひとつ『客家風情誌』の中でも、「客家精神」の特徴として (A) 艱苦創業（困難に耐えて財産を興すこと）、(B) 愛国・愛郷土（国家・郷土を愛すること）、(C) 崇文尚武（文武の両道を尊重すること）の3点が挙げられている〔黃火興・他 1991：21-26〕。

これらの叙述に共通して見える客家像は、勤勉で質実剛健であるとともに教育熱心で進取の気性に富み、強固な自尊心と愛国心を有する優れた資質の人々ということになる。特に強調されているのは、勤勉さと教育を重視する伝統のたまものとしての有能な人材の輩出であり、傑出した人材の多さにおいて客家は特異であるとされる。また同時に、女性の労働能力の高さ、客家語をはじめとした古代中原の文化要素の保存、そして衣食住等における他の漢族とは異なる文化的特色も、客家の「特殊性」として強調される。

客家出身の歴史上傑出した人物がとりわけ多いという点に関して言えば、太平天国を指揮した洪秀全や、中国革命の父・孫中山（孫文）を客家出身とする言説が、少なくとも客家の人々の間では、広く流布・定着している。さらに、鄧小平や葉劍英など中国共産党の英雄たちの中にも多くの客家出身といわれる人々がいる。こうした客家出身の「英雄」は、古くは元軍と闘って敗れた南宋末期の忠臣・文天祥や、さらに南宋初期に金軍と戦った岳飛にまで遡られる場合もある。

客家の英雄輩出は中国本土だけにはとどまらない。第二次世界大戦後の国際政治の世界でも、台湾の国民党総統をつとめた李登輝や元台北市長・呉伯雄が客家出身であり、またシンガポールの首相を務めたリー・クワンユー（李光耀）、ゴー・チョクトン（呉作棟）といった人物も、客家出身であるといわれる。従って、北京政府の最高実力者であった鄧小平と合わせ、「三大中国系国家のすべての権力者に、客家人が就いている。数百年前に中原を追われた客家が、今、中国人社会の中心部へと戻ってきたのである」〔高木 1991：21〕などといった言説もまた、日本では通説として定着している感がある。

しかしながら、これらの「客家出身」といわれる歴史上の著名人たちが、どこまで明確に客家としての自己意識をもっていたか、あるいはそうした客家としての人脈を、どの程度まで意識的に自分の活動に役立ててきたかは、必ずしも明らかでない。この点に関して、筆者は既に平成13年度～15年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「近現代客家系著名人における客家アイデンティティ形成過程の研究」（代表者・瀬川昌久）において、孫文や、陳炯明、陳銘樞、陳濟棠ら「客家出身」とされる近代中国の著名軍人たちの出身

背景や活動事績を分析し、必ずしもそこに明白な「客家出身者」としての証拠や自己主張が見て取れるわけではないことを明らかにしている〔瀬川 2005〕。こうした客家出身著名人とされる人物の「客家性」の認定においては、当該人物がいかなる自己意識をもっていたか、いかなる人脈の中で活動していたか以上に、しばしばその出身地点を手がかりとした「類推」にたよる傾向がある。

他方、こうした客家出身の「英雄」の存在は、少なくとも一部の客家知識人の間では、客家の優秀性や不屈精神、さらには中国に対する愛国心などを象徴するものとして、重要な意味をもって語られてきたものであることは事実であり、言説のレベルでの「客家特殊論」「優秀なる民系＝客家」のイメージ形成の過程に深く寄与してきたと考えられる。

客家を特別な人々と見るこうした視点は、すべてが客家知識人自身による自己宣伝や賞賛の言説に帰されるべきものではなく、清末以前からある程度まで中国の国内外に知られるものではあった。例えば、客家の勤勉さに関連しては、1895年に出版されたアイテルの著書 *Europe in China* に、香港の中国系住民について、それが本地（広東語話者）と客家（客家語話者）に大別されること、両者は方言と習俗において異なること、そして客家は本地に比べて後来者であるとした上で、本地集落の間隙をぬうように丘陵地や湿地など劣った土地に住み着き、炭焼き夫や鍛冶屋、散髪屋、あるいは木こり、石工、水運び人夫などとして働いていることが紹介されている。そして、本地は概して教養があり活動的だがずる賢く、それに対し客家は勤勉で実直であるとの比較を行っている〔Eitel 1895 : 131-132〕（注2）。

客家の出稼ぎの多さ、ならびにその勤勉さについては、その後、日本人の調査者の目にも留まるところとなった。例えば、昭和7年（1932年）に外務省情報部が出した『広東客家民族の研究』には、「(客家の)国内出稼人には理髪屋、鍛冶屋、石屋等最も多く、広東に於ける理髪職の如きは八割迄客家人である。その他大工、左官等の職人もまた少なからず、一般に客家は手先の労働に秀で、上海方面にも相当多数の客家の職人が現在して居る由で客家はまた一般刻苦精励の美風あるを以て、労働者として歓迎せられ車夫苦力等多く、東江地方には女苦力、女轎夫等を見ることも尠くない。広九鉄道沿線に於ける女苦力中三分の二は客家であるという」〔外務省情報部 1932 : 17〕と記されている。

客家女性の労働文化の特殊性については、上引の『広東客家民族の研究』の中に女苦力、女轎夫の多さとして触れられており、またF・ブレイクの研究からも次のような一節を引くことができる。「最近の村落調査のデータを比較してみると、客家女性と非客家女性の役割が一般的に異なっているということが裏付けられる。広州郊外の大きな広東人村落について記述しているC・K・ヤンの観察では、女性は多くの種類の農作業に参加するものの、犁を引くなどといったきつい労働は行わない。また台湾南部では、福建人は女性を田

畑で働かせることを好まないの、農繁期の人手不足が深刻であることをB・パスタナクは見いだした。客家女性は犁を引くことから刈り取りまで、あらゆる農作業を引き受けることも希ではないから、このように広東人や福建人の女性と客家女性では役割に相違がある」[Blake 1981 : 51]。

客家女性がこのように働き者であり、重労働をよくこなすとされる点は、しばしば彼女らが「纏足をしない」ことと結びつけて語られる。纏足とは言うまでもなく前近代の中国において女性の脚を幼少より人工的に変形させて小さく見せる風習であり、苦痛を伴うこと、不衛生であること、女性の自立した行動を束縛することなどの理由から、中国前近代の「悪習」のひとつに数えられることも多い。この纏足について、多くの客家紹介書では客家女性には纏足の習慣がないとされ、あたかも客家とそれ以外の中国人を区別する指標のひとつであるかのごとく語られている [陳運棟 1978 : 18-19、高木 1991 : 101-102、林浩 1996 : 238-239]。

確かに、民国期の風俗改良以前には、中国全土に纏足の風習が一般化していたことは事実と思われるし、客家語話者の居住地域の中に、その風習が一般的ではない地域があったことも事実と思われる。ただし、纏足の有無はそうした方言集団を隔てる文化要素であるというよりも、まずもって前近代の中国社会における社会階層間の相違を反映する事象で

あったことに注意する必要がある。山間地の農山村での貧しい生活や、後来の移民として経済的に下層の生活を強いられている社会状況下では、主に富裕層の審美的風習として定着していた纏足が、浸透しがたかったとしても不思議はない。周達生は、客家以外にも、華南の「蛋家」(蛋民、水上居民)や貴州の「穿青人」のように、纏足の習慣を欠くとされる集団があったことを指摘している [周達生 1982 : 84]。これらはいずれも他の漢族とは習俗や生活様式の点で異質性が認められ、漢族の中ではマージナルな位置づけにあるとみなされることの多い集団だが、少なくとも「蛋家」の習俗上の特殊性については、それが古代「越」などの異民族の系譜を引くことによるも



広東省東江中流域の客家女性 (かぶっているのは「涼帽」と呼ばれる労働用の日除けつき帽子)

のなのか、あるいはむしろ、水上生活や貧困という社会経済状況の所産なのかについては、長く議論のあるところである。

客家の中心地とされる旧・嘉応州地域（梅県地域、今日の名称は梅州市）の清末の状況について、同地出身の詩人・外交官である黄遵憲は以下のように記している。「当地の習俗は、……纏足や化粧をしない傾向があり、州城の中や北路の一、二ヶ村にはそれが見られるが、農村には全くそれが見られない」[房学嘉 2006 : 23。『黄遵憲文集』からの引用]。一見、清末の梅県において纏足が欠如していたことを示す資料であるが、注意深く読めば、州城内やその近郊農村の住民には、纏足の風習があったということを示していることがわかる。

他方、清末以前、本地（広東語話者）や福佬（閩南語話者）、あるいは華南以外の地域の漢族の間で、特にその社会経済的に下層の人々の中に、纏足をしなかった人々がどの程度いたか、より詳しい検討が必要であろう。「天足」（纏足しない自然の足）では結婚相手が見つからないほど纏足の風習は社会に蔓延していたともされるが、例えばいわゆる「マイナー・マリッジ（minor marriage）」の形態で妻となった女性たち、とりわけ「童養媳」や「招婿婚」、「妾」などのように女性の実家の名誉競争をとまなわぬ形態の婚姻の主役女性たちについて、その纏足の実態を再検討してみる価値がある。そうした前近代の中国社会全体にわたる検証を経ずに、安易に纏足の欠如を客家という方言集団全体の特性として仮定することは、客家自身や他の民系の人々の中にあるステレオタイプ的なイメージを、言説として再生産しただけに止まる可能性がある。

客家文化の特殊性を象徴し、またそれが古代中華文明の中心地・中原に結びつくものであることの根拠としてしばしば言及されるのが、客家の言語である「客家語」である。この客家語という文化要素を初めて学術的な研究の俎上にのぼらせたのも、羅香林であった。羅香林自身は言語学者ではなかったが、故郷の広東省興寧県の客家語を材料としてその音声学的記述と分析を試み、それが母音 37（単母音 7）、子音 26（単子音 20）、声調 6（陰平、陽平、上、去、陰入、陽入）からなっているとしている [羅香林 1933 : 126-138]。そして、客家語は先秦時代の中国語との近似性が高く、元代以降の北方中国語とは異質であると結論している。この羅香林の仮説は、1970 年代に中川學により指摘されているように [中川 1977 : 439-440]、客家語内部のバリエーションの研究や他の漢語方言との体系的比較研究が必ずしも充分になされていない段階で提唱されたものであった。

その後、客家語に関する音韻論的研究は、1940 年代の董同龢をはじめ、1980 年代以降は羅肇錦、鄧曉華、羅美珍、黄雪貞、周日健など、多くの研究者により行われている。同時に、語彙の収録や文法の研究も、橋本萬太郎、羅肇錦らをはじめ、多くの研究者が試みている。羅香林自身も、またその後の客家語研究者たちも、決して客家語が古代中原の言

語そのものだと主張しているわけではない。しかし、客家に関する概説書の中には、客家語が「古い北方語」そのものであると述べているものも散見される（例えば〔高木 1991 : 11、林浩 1996 : 106-107〕）。

客家語の歴史、あるいはその系統については、その後の客家語の専門的研究者の間でも未だ完全には合意が形成されているわけではなく、古代中原の言語に由来するという羅香林の仮説も、実証された事実とは言いがたい。漢語下江方言（南京官話）との近縁性を主張する謝重光の説〔謝重光 1995〕や、ショオ族などの「先住民」の言語との関係を重視する羅美珍の説〔羅美珍 1994〕、あるいは北方漢語との近縁性を疑問視し、むしろ南方の他の漢語方言との近似を主張する J・ノーマンの説〔Norman 1988〕などもある。つまり、この点に関して、一部の客家の紹介書の中で通説的に語られている見解は必ずしも専門研究者の間で合意された盤石の基盤の上にあるわけではないことに留意しておかなければならない（注 3）。

客家の生活文化が他の漢族と比べて「特異」とであるという言説も、多くの一般向け客家紹介書の中で繰り返されているところのものである。もっとも、羅香林自身は、その『客家研究導論』の中では、客家の特性として主にその言語、人材、教育、労働文化等を指摘しているのみで、生活文化面への言及は少ない。食文化についての説明は皆無で、衣装に関して、ただ客家女性の衣服が、その勤勉・儉約を重視する精神ゆえに質素である、と述べているにとどまる。唯一「住」との関連で、客家の「屋宇与墳塋」（家屋と祖先の墓）についてやや詳しい解説が試みられているのみである〔羅香林 1933 : 179-182〕。しかし、その後の客家解説書の中では、羅香林によって唱えられた客家の中原起源説を補強するものとして、客家の生活習俗の特異性、特に他の南方漢族には見られない特徴とされるものが、繰り返し取り上げられている（例えば〔陳運棟 1978 : 第 4 章、高木 1991 : 第 3 章、林浩 1996 : 第 4、5 章〕など）。

「衣」に関しては、例えば『客家服飾文化』などと銘打った専著も出版されている〔郭丹・他 1995〕。同書では、客家の伝統的衣装として、男性の場合には「対襟短衫」、「中長対襟衫」、「馬褂」、「長袍」、「背心」などがあり、また女性の衣服としては「大襟衫」、「衬衣」、「背心」、「褂褂」、「夾袄」などがあるとしている。特に女性の衣装について、山地での農作業への適応から、スカート状の衣服は発達せず、「大襠褲」、「抽頭褲」などのズボン形式の衣装が一般的であること、それゆえ清代満州人の衣装から中国女性衣装として一般化した「旗袍」（チーパオ）は客家の家庭には受け入れられなかったことなどが指摘されている〔郭丹・他 1995 : 16-36〕。

もっとも、別の解説書では、民国以降の「改装」（服装改革）により、そうした伝統中国式の「唐装」に加え、「中山装」（中山服）や「西装」（洋服）が普及し、また旗袍も受

容されたことが記されており、また旧時の客家女性の服装として、襷付きの「百褶裙」、上着と連結した「連衣裙」などの「客家裙」（客家スカート）にも言及されている〔黄火興・他 1991：49-54〕。つまり、伝統的「唐装」の形式にしても、その後の「改装」による近代的な衣装の受容にしても、他の漢族地域と比べて本質的な相違があるかどうか疑問は大きい。この点について 1980 年代に先駆的な観察をなした周達生は、「……客家の集居する梅県地区と龍岩地区では、観察した限りでの客家の衣服は、他の漢族居住区のそれに比べて、とりたてて異なるところはない」とも述べている〔周達生 1982：81〕。

食文化についても同様のことが言える。『客家飲食文化』という客家の食文化についての専著によれば、客家が粥を好まず「乾飯」すなわち普通の米飯を好むことを、他の漢族に比べて労働が過酷な客家に特有の習俗であるとする言説も一部には見られるが、客家が果たして粥を好まないかどうかについては論争があり、確かに台湾客家は粥より乾飯を好む傾向があるものの、福建・広東・江西等の客家の場合、乾飯同様に粥も常食している（ただし、粥にも濃淡の区別があり、通常は濃い粥の方が好まれた）と指摘されている〔王増能 1995：8-9〕。「かつては食料が不足していたので、3食ともに粥を食べ、（麦やイモ類等の）雑糧でそれを補っていた。富裕な家の場合でも、多くは2食が粥で1食が御飯であった」〔黄火興・他 1991：59〕などとしているものもある。上掲の周達生もまた、客家が必ずしも粥や麺を嫌うわけではなく、客家の中心地とされる梅県地域でもそれらは日常的に食べられていることを指摘している〔周達生 1982：87〕。「客家は粥を食べる」「いや、食べない」といった言説は、とかく方言集団間の文化の相違をステレオタイプ化して大げさに語る言説の一部であると考えられる。

客家の「住」の特異性に関しては、福建西部に見られる「土楼」が引き合いに出されることが非常に多い。「土楼」は厚い土壁をもった大型の集合住宅であり、特に「土楼」の中でも円型をした「円型土楼」は 90 年代以降日本のテレビ、雑誌などでも頻繁に紹介され、海外にも有名となった。最近では 2008 年 7 月に世界遺産登録を果たすなど、土楼建築は客家文化の特殊性を可視的に代表する存在になったかの感がある。

福建省永定県地方の「土楼」と、広東省梅州地方の「三堂二横式」、それに羅香林自身が言及している広東省東江地方の「圍楼」など、確かに客家居住地域には一種独特の建築様式が見られるが、見かけ上の奇抜さを別にすれば、その建築上の基本理念については一般の漢族住居建築と何ら変わるものではないことも指摘されている〔周達生 1982：112〕。また、そもそも「土楼」が存在するのは客家居住地域の中でも福建省南西部を中心とする一地域に限られ、同じく客家の居住地域ではあっても、客家の中心地とされる広東省の梅県地域や東江地域には見られない。他方、「土楼」の住人が全て客家であるという訳でもない。福建省南靖県等では「土楼」の住民が客家ではなく福建系の漳州人である

場合があると指摘されており〔黄漢民 1995：161〕、それゆえ「土楼」が客家語系の言語の分布域全体に共通する文化要素と言えないばかりか、特定の方言話者の分布地域とは一致しない局所的な地方文化と考える必要がある（注4）。

したがって、こうした文化上の相違と言われるものの中には、客家語話者の有する地方文化要素と他の方言グループの人々が有するそれとの違いについての正確な記述であるよりも、客家自身やそれ以外の方言集団に属する知識人のステレオタイプのものの見方・考え方の中で増幅され誇張された言説が、相当程度含まれている可能性が指摘できよう。

3. 客家特殊論の背景とその限界

客家出身者の中には、特にその知識人を中心として、他の漢族方言集団との差異化・対抗を軸とする、「客家アイデンティティー」とでも呼び得る独自の強い自己意識が生まれてきた。そうした自己意識に基づいた「客家文化」や「客家の歴史」に関する言説は、客家の特殊性を高度に強調する性格が強かった。他方、学術的、非学術的たるを問わず、客家についての第三者による記述の中でも、そのような客家知識人による客家の特異性についての言説を所与の事実として受け入れた見方が支配的となっている。

このような客家特殊論言説にひとつの学問的起点を与え、またその後の客家知識人たちの客家アイデンティティーの重要な根拠のひとつをも提供してきたのは、前節で述べたように1930年代になされた羅香林による客家研究である。

羅香林は1906年に広東省東北部、梅県に近い興寧県に生まれた。梅県は広東省における客家居住地域の中心地とも言える地域で、そこで話される客家語がもっとも「標準的」客家語だとされる。興寧県も、梅県の客家語とは若干の方言差を有しつつも、客家語の話される地域である。したがって、羅香林は一生涯「客家」をもって自認することになるし、今日に至るまで興寧と言えば客家の主要な居住地域のひとつとして数えられている。

羅香林の父・羅師揚は、清末から民国初期にかけて地元の中学・師範学校の校長や興寧県長、そして広東省議員等を歴任しており、同地域における近代教育・近代政治の幕開けを押し進めた名士の一人であった。羅香林はこのように孫中山らの国民党革命に共鳴する知識人の家庭に育ち、中学卒業の後は上海、次いで北京に出て学業に専心した。1926年には清華大学経済学系に入学、そののち歴史系に転科して王国維らに学んだが、同時に社会人類学をも学んでいる。この時期、清華大学には社会学系などが新設され、S・シロコゴロフ（Sergei M. Shirokogoroff）らが教壇に立ち始めた時期に当たる〔Guldin 1994: 44-45〕。

羅はまた、1930年に清華大学の学部を卒業すると、同大学の大学院に進むかわり、燕京大学の大学院にも籍を置いている。当時の燕京大学と言えば、アメリカのコロンビア

大学に留学してF・ボアズ（Frans Boaz）らの薫陶を受けた呉文藻が帰国し、社会学系を創設して本格的な欧米流の文化人類学教育を開始した時期に当たっている。当時の羅香林が大学院での研究テーマとしていたのは、古代華南の民族集団「百越」の起源など、あくまで歴史学的なテーマではあったが、彼の学問的素養は当時の先端的社会人類学の理論、方法論をひととおりカバーするものであった。

1932年に広州の中山大学に職を得た羅香林は、自らの帰属する客家の起源や移住史へと研究の主力を注いでゆく。羅香林自身が整理しているところでは、当時、客家の起源や系統に関しては大別して以下の4種の説があった。第1は客家を「苗蛮」の分枝とみなすもので、清末に編纂された広東省の一部の地方志に客家が「玃」、「貉」などの差別的表現で記述されていることを根拠としている。第2は、客家を古代越族の子孫とするもので、民国期になってから編まれた『最新民国地誌』などに見られるという。さらに第3は、客家の民族系統は未定としつつ、ただし漢族とは別系だとするもので、アイテル（E. J. Eitel）など一部の欧米人学者の見解に見られるという。そして、第4の説は、客家が純粋な漢族の子孫であるというもので、E・ハンチントン（Ellsworth Huntington）ら多くの欧米の研究者が述べているものだとしている〔羅香林 1933 : 14-16〕。

羅香林も同書中で言及しているように、客家を「苗蛮」「百越」等と結びつけ、非漢族起源であるとする主張は、19世紀中葉に珠江デルタ西部で生じたいわゆる「土客械闘」、つまり客家語系住民と広東語系住民の武力紛争（注5）の後、広東語系の知識人の著した書物の中に散見される。そしてそうした主張がその後欧米人による解説書の中に取り込まれることとなり、例えば1920年に上海で出版されたウォルコット（R. D. Wolcott）著の*Geography of the World* という本の中では、“In the mountains are many wild tribes and backward people, such as Hakkas and Ikias”（山中には客家や夷家のごとき多くの野蛮部族や後進的人々がいる）というような表現がなされたのだという〔羅香林 1933 : 7〕。

羅香林の学術的問題意識は、まさにこのような、客家を「苗蛮」の子孫あるいは古代「百越」の末裔の非漢族とする「誤った」学説への反発から生じ、終始一貫して客家が古代中原を起源地とする正統漢族の子孫であることを立証することに心血が注がれている。そして彼は、客家の人々が保有している族譜を中心的な資料として用い、それに他の歴史資料を組み合わせることにより、中原から華南一帯への客家の壮大ともいえる移住経路を描き出した。

羅香林の仮説は以下の通りである。晋の懷帝永嘉五年（西暦311年）に匈奴が洛陽を攻略して後、いわゆる五胡十六国の時代に、中原の漢族の多数が戦乱を避けて南方へと移住した。この漢族には3つの支派があり、第1は陝西、山西両省方面に住んでいた人々で、湖北から湖南を経、広東、広西にまで移動していった。第2支派は河南、安徽両省

方面の住民で、江西省に入った後、さらに福建省西部などの隣接地に移っていった。第3支派は山東省方面の住民で、江蘇から浙江、そして福建へと移っていった[羅香林 1933 : 41]。羅香林は、これらの3支派が今日の広東人、客家、福建人の祖先に当たるものと推定している。

これら3路線の移民中、客家の祖先となった人々は五胡十六国、唐末黄巢の乱、モンゴルの侵入などの戦乱を機に南下をくり返し、江西省南部から広東省北東部の地域に移動した後、清代初めに広東省中・西部に達し、さらに広西、四川などにも広がっていった。明代以前の客家の移住原因は、主として戦乱によるものだったが、清代のそれは客家内部の「人口圧」によるものだとしている[羅香林 1933 : 45-62]。また、既に触れたように彼は客家の中原起源を証明するべく、客家語の中に古代中原の言語の要素が残存していることを示そうと腐心している。国際音声字母を操り、独自に客家語の系統を論証しようとしているこのような彼の研究は、清華大学、燕京大学での文化人類学の基礎を習熟した成果の一端を示すものであろう。

この羅香林による客家研究の基本的視点とその移住経路に関する仮説は、その後の客家研究者の多くに引き継がれていった。例えば、台湾における代表的な客家研究者・陳運棟は、その著書『客家人』の「緒論」において、以下のように述べている。「客家人の祖先は、大部分が中原の世家大族であり、社会の上層に属する者たちであって、中華民族の精華を代表していた。彼らは幾多の曲折を経ながら閩、粵、贛の辺境の山岳地区に移住し、異族の侵略に勇敢に抵抗してきただけでなく、現地の土着民とも生存競争をしなければならなかったが、ついにはその文化的力量によって、畚瑶を駆逐し、福建、広東、江西の辺境地区全域を占有するに至った。……彼らはこの山岳地区において、中華民族伝統の風俗を保存してきたのみならず、中華民族伝統の言語、とりわけ唐宋時代の言語をも保存しており、今日我々が中国古代言語の痕跡を研究することを可能にしている。これは我々にとり実に幸運なことである」[陳運棟 1976 : 11]。そこには、羅香林によって描かれた中原から華南の地に至る客家の大移動を事実として認定するのみならず、先住者を駆逐して中華文明の真髄を死守する者としての客家の姿が、より強固に主張されている。

中国本土では、中華人民共和国成立後の1950年代には、文化人類学を含めた欧米流の社会科学が排斥の対象となり、関連分野の中では多民族国家・中国の「民族団結」の基礎作りには寄与すると考えられた民族学のみが政策科学として是認されることになった。そうした中で、漢族の精華を誇り、南方の諸民族集団に対するその異質性、優位性をことさらに唱える羅香林流の客家研究は、いったん影を潜めることとなった。しかし、改革開放後、1980年代以降中国本土において伝統文化についての再評価やその研究の復権がなされるに及んで、羅香林のパラダイムに沿った客家研究もまた復権したのであった。それは、例

えば1990年代に中国本土において「客家学」の樹立を新たに提唱した呉澤の、以下のような叙述の中にも濃厚に見てとることができる。「中華民族の発展の上で、客家先民とその後裔は、長江流域や閩、粵、贛三角地帯の開発、華南地域の経済や文化の繁栄、漢民族という大家族を発展、強化し、漢文化および中原文明を伝播し発揚し輝かしいものにする、なかんずく近代以降、中国と外国との経済、文化の交流を促進すること等に対して、計り知れない影響を及ぼし、歴史を輝かす貢献をなしてきた」〔呉澤1990：1〕(注6)。

客家による客家のための客家研究は、台湾、中国本土を問わずこうして客家至上主義的傾向を捨象できないまま、20世紀の最終段階を迎えていた。始祖・羅香林の時代には、民族集団というものについての認識は未だ曖昧で、羅香林自身は西洋学問における語族分類や進化主義的・人種主義的民族認識と、中国文化の中に存在してきた血統論的社会認識とを巧みになえ混ぜた独自の概念で、客家という民族集団の統合性と持続性を理解しようとしていたものと思われる。

それは、羅香林が客家というまとまりを学術的に表象するために創出した用語「民系」に端的に現れている。「民系」とは、「民族の中の種々の支派を解釈するため」〔羅香林1933：24 註一〕に羅香林が造出した用語であった。漢族の中の「種々の支派」を区別するに当たり、彼が根拠としてもっぱら用いたのは、華南各地の親族集団が保有している族譜であった。族譜は言うまでもなく父系血縁の系譜であり、父系祖先の来歴とその偉業を記した文書である。父系出自集団の系譜記録としての族譜に依拠する以上、その上に構築される客家民系は、必然的に血統主義的色彩を帯びることとなった。民族と人種、文化集団と生物学的集団との弁別については、既に20世紀の初頭の人種主義批判や進化主義批判の中で、欧米の人類学においては議論されたことであり、また中国が1920年代30年代に欧米より移入し、羅香林自身が清華大学、燕京大学等で学んだ学説も、シロコゴロフのエトノス (ethnos) 論や、ポアズの歴史主義人類学、ラドクリフ＝ブラウンの機能主義人類学を基盤とするものであったと思われるが、族譜という中国社会に内在するツールを用い、そこに前提として包含されている出自や系譜の概念に依拠したことが、結果的に彼の客家像をかなり硬直的なものとしていた。

文化人類学における民族集団と文化要素の関係、あるいは特に民族の境界 (ethnic boundary) についての議論も、また親族組織やその系譜観念の仮構的性格についての議論も、基本的には20世紀後半の展開に属するものであり、羅香林がそのような硬直的「民系」概念にとどまっていたとしても、それは彼の責任ではない。しかし、台湾や中国本土において彼の客家研究を引き継いだ次世代の研究者たちは、あらためて再考に付されてしかるべき基礎的諸概念を、あまりにも忠実にその創始者から引き継いでしまったのであった。それは何よりも、客家研究の後継者たちが、客家出身の知識人に偏っており、自

己の民系の正統性を実証するという学問的動機付けを、その先駆者と共有していたことによる。

しかし、このような客家出身者による客家自身のアイデンティティーに立脚した客家研究は、その学問的動機付けが強固であればあるほど、ある種の偏向に陥る危険度が増すことは避けられない。このことを最初に批判したのは、部外者である日本の中川學であった。1970年代という比較的早い時期に、中川は既に「羅香林氏のこのような叙述を支える歴史意識は、古代中原王朝以来の正統をつぐ客家、という客家的正統論に他ならない。そこにおいては、歴史事象は正統論の正当化のために編成され動員される」[中川 1977: 68-81]と批判を行っている。また、1980年代には周達生もまた羅香林流の客家研究に潜む「レイシズム的偏向」を批判している[周達生 1982: 75]。

20世紀半ば以降の文化人類学において、民族集団あるいはエスニック・グループについて繰り返し議論されたことは、それが互いに孤立的な「系統」ではなく、その境界維持は自動的に行なわれるものではないという点である。むしろ、ひとつのエスニック・グループの自己意識の成立とその境界維持には、他の集団との不断のインタラクションが不可欠であり、そのインタラクションのあり方によって、自己意識や境界維持のあり方もまた左右される、という状況依存的な民族集団観である。さらに20世紀の終盤に至ると、民族集団とは須く誰かによって発明されたり創り出されたものであり、それ自体として文化的にも血統的にも持続する「本質」とはみなさないポスト・モダン的な民族集団観が主流を占めるようになった。もし、客家という1民族集団が、隣接集団との間に極めて強固な境界意識を生み出したり、長期にわたって同一性の高い自己意識を維持しているのだとしたら、それはむしろそれを促すような特殊な政治・経済状況や、それを意図する誰かの思惑を探らなければならないことになる。

人類学におけるこのような研究史の展開を踏まえた上で、客家をはじめとする漢族内の下位集団や、周辺の少数民族の問題を扱うためには、通時的な「系統」を実体化した議論からいったん離れ、共時的、また同時代的なダイナミズムに目が向けなければならない。そして、そのためには、「客家」という歴史上・地理上の総体を所与の出発点として考察するのではなく、個々の小地域のもつ社会的、経済的、文化的な状況の中で、宗族、分節、個人といったアクターが見せる個別具体的な行動を分析してゆく必要がある。個々の地域社会内部における実証的な客家研究の必要性を、筆者が1980年代より主張し続けてきた所以はここにある。

系統論的客家研究の中で客家の人々に貼られた「特殊な人々」というレッテルは、個々の地域社会内部の社会関係の実態に立脚することなく、客家という「民系」全体の存在を自明の前提とした上で、その全体に対して付与されたイメージに過ぎない。このような個

々の地域社会の実態を捨象して総体としての客家のイメージが構築されてゆく過程は、近代国家としての中国の成立の過程と同期している。折りしも、辛亥革命から抗日戦争を経て国共内戦に至る中国近代史の展開の中で、とりわけ軍事・政治の領域で顕著な役割を果たした中国南部出身者の中には、客家語の話される地域の出身者も少なくはなかったが、そうした著名人を一人一人挙げ連ねては、彼も客家系の偉人、彼も客家系の著名人、と解説した羅香林の主張〔羅香林 1933 : 248-272〕は、後々の客家知識人の手による客家紹介書の中に忠実に反復・増強されて、客家という「明確な」民族集団の構築を完遂することとなったのである（例えば〔丘権政 1999〕など）。

もちろん、そのような客家中心主義的、あるいは客家至上主義的言説は、時として客家以外の知識人からの反発を招かずにはおかなかったが、そのような客家イメージの構築に寄与した言説は、ネガティブなもの、ポジティブなもの双方を含め、いずれも客家の特殊性を殊更に強調する「客家特殊論」としての性格をもっている点に特色がある。それは実証的で学術的な客家についての研究とは一線を画すべき性格のものであり、後者にとって前者は一種の分析対象、研究の素材たるべきものである。それらが判然としないままになえ混ぜられて展開してきたところに、これまでの客家研究の著しい特色がある。

従来の客家特殊論を超克することが可能になるのは、個々の地域社会のコンテクストに基づき、これまで「客家」という総称のもとに一括されてきた人々をより柔軟に捉え直すことを通じてである。同時に、漢族研究、少数民族研究を包含した、より柔軟でダイナミックなエスニシティ研究を華南、ひいては中国全体において可能にするために、それは是非とも必要な作業なのである。客家を「純粹漢族」の子孫と見なすにせよ、華南の山地民にルーツをもつ「別種」と見なすにせよ、客家の特殊性のみに着目した系統論的なものの見方では、民族集団間の動的諸関係についての研究は可能にならないからである。

4. 近年の実証研究

上述のとおり、羅香林の学術研究に先導される形で広く定着してきた客家イメージであるが、中川學や周達生らの先駆的な批判に続き、1990年代に入るところよりその強烈な自己正統化の言説を客観的に見直そうとする視座が、徐々に客家出身の客家研究者自身の中からも現れ始める。例えば、台湾において徐正光が編集した『徘徊於族群和現實之間—客家社會文化』は、客家文化の称揚者たちからなる執筆陣が台湾の客家系住民の言語、音楽から風俗、信仰等に至る社会文化的な「特色」を書き連ねた紹介書である点においては従来の客家紹介書の形式を大きく逸脱するものではないが、編者の徐正光はその序文において以下のように書いている。

「台湾においては、客家は常に社会の中で陰に隠れた存在だと言われてきた。彼らは、

一般の生活の中では北京語や閩南語を非常に流暢に操り、自分たちの母語を少ししか使わないか、あるいは全く使用しない。社会政治運動へ参加することも少なく、あるいは積極的に参加する場合でも彼らはひとつのエスニック・グループとしての客家の身分を表立ったものとしなくておくれであろう。……だが実際には、エスニック・グループとしてのその深層の特質から分析すれば、客家は極端に歴史意識を重視する人々でもあり、また悠久の優れた文化をもっていることを誇り、強烈なアイデンティティを有するエスニック・グループでもある。……表面的に見れば、身を潜めた目立たぬその存在と強烈なエスニック・アイデンティティとは調和しがたい矛盾を表出しているようにも思えるが、それは確かに社会の生きた現実であり、それは単なる客家のエスニック・グループとしての集団的イメージであるばかりではなく、客家の個々人の行動の中にも具体的に表れている」[徐正光 1991 : 4-5]。

ここには、客家を羅香林以来の「民系」研究の延長に位置づけるのではなく、文化人類学のエスニック・グループ（族群）研究の中に位置づけ直すことを通じて、より客観的にその現実の姿を直視しようとする「冷めた」視点を見てとることができる（注7）。

中国本土においても、張応斌は羅香林以来の従来の客家研究を客観的に捉え直し、そこには研究テーマが客家の「源流」と客家語のみに偏る傾向、ならびに考察が主観的で情緒的なものに墮する傾向が否めないとして批判を加えている [張応斌 1996 : 2]。これは、客家の中心地とされる梅州の嘉応大学客家研究所の出版物に現れた論文であるだけに、注目すべきものである。

このように 1990 年代に客家出身者の研究者自身によってより客観的な客家研究が指向されるようになるに先立ち、英語圏で発表されたものとしては Sow-Theng Leong（梁肇庭）による歴史学的な客家形成史の実証的研究もまた見逃すことができない重要な存在である。Leong の研究は、実際には 1970 年代から 80 年代にかけて行われたものであるが、この著書は 1987 年の彼の死去の後にまとめられた遺稿集である。

Leong は、客家のような集団を考える際に「文化集団」の次元と「エスニック・グループ」の次元とを明確に区別する必要があるとする。すなわち、「……意識されていると否とに関わらず共通の文化・伝統を保持しているだけの集団は『文化集団』と呼ばれるべきものに過ぎない。他者との競争の中で、自分たちの社会資源獲得上のシェアを増大させたり生存上の危機を減少させるために、そうした共通要素が人々を団結させ衝き動かすものとして意識的に選び取られた時のみ、それは『エスニック・グループ』となるのである」[Leong 1997 : 20]。それ故、「……広東人、福佬、客家などは文化集団であり、それらがエスニック・グループたり得るのは一部の場合のみなのである」[Leong 1997 : 20] とも述べる。

では、そうしたエスニック・グループの生成がもたらされる契機とは何かと言うと、移住こそがそうした契機の中の重要なものであると Leong は主張する。「他の社会でも常には言えぬまでも多くの場合そうであるように、中国では『土着』の者と『新来』の者との対立の形で、エスニックな意識やエスニック紛争は移住という文脈の中で生み出されるのである」[Leong 1997 : 21]。そして、そのような人々の移住を引き起こすメカニズムとして注目したのが、G. W. Skinner の提唱するところのマクロリージョン間の経済的周期のズレであった。

従来の客家イメージに修正をせまる研究としては、福建の客家宗族の系譜に関する陳支平の研究もまた注目に値する。それによれば、客家系住民と閩南人系住民が接して住む福建西南部地域では、客家—閩南人—間の相互転換の例を数多く確認することができるという。例えば、円型土楼をもつことで知られる南靖県書洋郷の蕭氏一族は、宋代に江西省泰和県から寧化石壁経由で南靖に住み着いたが、その中の一部の分枝は漳州に移住し、福佬(閩南人)になったという [陳支平 1997 : 83]。またその逆に、寧化や上杭の沈氏や張氏のように、唐代に陳元光の軍に従って福建に入ったとしながら、現在では客家である人々もいるとしている [陳支平 1997 : 68-69]。このように、客家とそれ以外の民系との境界線は時として曖昧なものであることが明らかにされていった。

同様に羅香林流の客家イメージに変更をもちた研究として、房学嘉と王東の著書が挙げられよう。房学嘉の著書『客家研究探奥』は、考古学的な近年の発見資料などに依拠しつつ、閩・粵・贛3省交界部には古代越人系の先住民文化が存在し、今日の客家はこの非漢族系先住民を母体とし、中原からの少数の漢族系移民の文化的影響を受け、徐々にできあがったとの仮説を提示している [房学嘉 1994]。古代の具体的な非漢族文化に言及しつつ、客家全体の「血統」上の非漢族起源説を提起した点では、羅香林以来の「通説」を真っ向から覆えそうとする斬新な主張であった。ただし、房も客家語に代表される客家の文化的特徴の多くは中原の漢族起源のものであるとしており、文化的次元では客家が中原の系譜を引くものであるとの立場をとっている。

王東の『客家学導論』もまた羅香林以来の客家研究の潮流に大きな修正をほどこそうとする意欲的な研究であった。王は客家の起源を多元的なものと考えており、中原から来た漢族系移民と、その移住経路上で出会った様々な集団との融合により、少なくとも4つの段階の「客家先民」を経て、今日の客家が形成されたとしている [王東 1996]。王によれば、「客家」という呼称が最初に使われるようになったのは明代中期だが、それは潮州地域の閩南語系の住民が閩・粵・贛3省交界部からの客家語系移住者に対して与えた地域的・局所的な名称に過ぎず、それが後に3省交界部の客家語系話者全体に拡張して使われるようになり、さらに時代が下るとその地域の住民が自称として用いるようになった

た、としている〔王東 1996 : 132-134〕(注 8)。

このように、客家研究は 1990 年代以降、中国本土においても羅香林の客家特殊論的研究の枠を越えようとする動きが顕在化している。しかしながら、より実証的にそうした新たな客家研究の方向性を開こうとする研究は、日本において日本語を媒体として公表されている点を付け加えなければなるまい。

日本における実証的な客家研究は、前述の 1980 年代以前の中川、周らの研究を引き継ぐ形で、筆者自身の著書〔瀬川 1993, 1996〕によって展開されている。これは主として香港新界やその隣接地域でのフィールドワークをもとに、地域社会内部における客家語系話者住民の自己意識や具体移住経路、生活習俗などから、従来の客家像の見直しを提起したものである(注 9)。

また、それに加えて、菊池秀明による清末広西での太平天国運動への客家系住民の関わりを詳細な歴史文献資料によって実証した研究〔菊池 1998〕をあげることができる。菊池は、客家語が太平天国運動において重要なコミュニケーション媒体となっていたことや、当時の広西社会における客家系住民の社会成層化などから同運動が胚胎してくる過程を、膨大な傍証資料を通じて緻密に論証している。

さらに、2000 年紀半ばに入ってから、日本語による新たな実証的客家研究の好著が相次いで刊行されている。第 1 は飯島典子による『近代客家社会の形成—「他称」と「自称」のはざままで〕〔飯島 2007〕であり、第 2 は蔡驥による『汀江流域の地域文化と客家—漢族の多様性と一体性に関する一考察〕〔蔡驥 2005〕である。

飯島は中川や瀬川の論著に刺激を受け、「客家」という名称が歴史上現れ、さらにそれが自称として確立される過程を、歴史文献の手堅い分析手法によって解明しようと努めている。用いられた資料は地方志、実録などの漢籍資料、西洋人宣教師の書簡・報告書の類、鉱山・鉱業関係の調査報告書、華僑・華人団体の出版物などであり、その分析からは「客家」という名称の登場は、嘉応州/梅州地域に関する限りきわめて遅く、19 世紀までしか遡ることができないとしている。客家をひとつの言語集団として捉え始めたのは 1830 年代の西洋人宣教師であるが、客家の人々が客家語話者全体を意識し出すのは海外の嘉応州出身者が同郷組織を組織するようになった 19 世紀後半であり、しかもその時点ではまだ「客」を自称として名乗るに至っていないという。自称としての「客」や「客家」が定着するようになるのは、20 世紀に入り 1930 年代になってからのこととしている〔飯島 2007 : 218-219〕。「客家」の自称化過程を実証的に捉えた研究としては初めての画期的な研究であり、しかも梅州地域の鉱業従事移住者や、東南アジアなど海外への移住者に注目しつつ、周辺民系の「他者」との出会いの中でそれが展開していった過程を詳細に論考している点に特徴がある。

蔡驥は上海出身で華東師範大学などで学び、その後日本の一橋大学に留学して前掲書の研究により博士号を取得している。蔡は従来の客家研究について総括し、1990年代に中国国内において現れた羅香林批判の新展開の成果と、中川、瀬川などの日本での客家研究の成果を吸収しつつ、福建省西部の汀江流域を舞台として、客家の文化とアイデンティティーの形成過程を実証的に解き明かそうとした。羅香林以来、客家の形成地とされてきた閩・粵・贛3省交界部に属し、今日客家の中心地とされる広東省東北部の梅州地域住民の多くがその祖先の居住地としてあげている福建省西部に注目し、地方志や族譜などの歴史資料ならびに現地調査資料をもとに緻密な考察を行っている。飯島の場合と同様、現地における鉄鋳業従事者などの移住民に注目している点に特色がある。王東の研究などに依拠し、客家とシヨオ族系の先住民との連続性を主張しており、客家をA類（中原漢族の自己意識をもつ狭義の客家）、B類（民族識別で漢族とされながらその後シヨオ族としての申請を行った人々）、C類（1950年代の民族識別でシヨオ族として客家から分離された人々）の3種に分けている〔蔡驥2005：293-306〕。今日の客家文化は古代中原からの漢族移民のもたらした文化要素と、閩・粵・贛3省交界部地域の非漢族的な地方文化の融合によりできあがったものとの解釈に立ち、「客家」という名称も同地域の非漢族系の山地民の自称である「山哈」に由来するという仮説を提示している〔蔡驥2005：306-311〕。客家とシヨオ族を同根のものとする論を実証的に展開したのものとして画期的な研究といえる。

このような、近年における実証的客家研究の新たな動向、とりわけ日本において発表されたそれは（注10）、旧来の自己正統化に動機づけられた羅香林の客家研究とは完全に一線を画し、ひとつの新たな到達点を迎えたと言っても過言ではなからう。こうしたいわば「他者研究」としての客家研究の攻勢を受け、客家出身の研究者や「客家ナショナリズム」の鼓吹者の側から今後どのような「自文化研究」が生み出されることになるのか、注目すべきところである。

5. おわりに

客家研究は、中国の人類学的・民族学的研究の歴史の中でもそのごく草創期に始められ、以後、漢族のサブグループの研究の中では突出して先導的な位置を占めてきた。ただし、それが当初から負っていた動機付け、すなわち客家出身の知識人自身による客家文化とその「民族系統」の正統性の実証という動機付けゆえに、それは極めて特異な展開をたどってきたのであり、創始者・羅香林が敷いたパラダイムがその後も長く後続研究者の視野を直接間接に拘束し続けてきた。

そのような「正統論」的な客家研究がもつ限界は、第1にそれが各地の客家系住民の

もつ諸文化要素についての客観的で公平な評価を妨げる可能性がある点であり、第2に研究対象たる客家の特殊性のみを強調しがちになる点であり、そして第3に客家と非漢族系の住民との連続性や相互作用を無視するか過少に評価する偏向がみられる点である。

20世紀における客家像は、こうした客家研究によって強く規定されつつ、誇り高き純粹漢族、優秀な人材を輩出させる民族集団、古代黄河文明の保存者、「東洋のユダヤ人」等として学術界以外の一般人の間にも徐々に定着していった。それは日本、台湾、中国本土いずれの出版界においても共通した現象であった。

しかし、1980年代から日本人研究者を中心としてそのパラダイムを超克しようとする動きが萌芽し始め、それは1990年代に入ると中国本土をも含めて本格的に展開されるようになった。そして、2000年代半ばに至って、それは一応の完成点と言うべきものをみるに至り、極めて公平で実証性の高い客家研究が数多く生み出されつつある。

その中では、客家と非漢族系の少数民族住民との関係や境界も見直されつつあり、従来は極めて間接的にしか対話点をもたなかった少数民族研究と客家研究とが、相互に連携しながら華南ならびに中国全体の文化・社会を理解してゆく道が開かれたのである。この意味で、客家研究はその成立以来約70年を経て、漸くその「特殊」な研究領域を脱し、中国に関する人類学的・民族学的研究一般の中に正しく位置づけられ、組み込まれてゆくことが可能な地点に到達したと言えよう。

注

- (1) 「客家語」の分布や話者数に関する研究としては、例えば『中国語言地図集』[中国社会科学院・澳大利ヤ人文科学院編1988]、羅美珍・鄧曉華の研究[羅・鄧1995]、劉鎮発の研究[劉鎮発1997]などを見よ。
- (2) アイテルはまた、英国の香港統治に対して本地は一般に敵対的であり、客家は協力的であるとも述べているが、これは羅香林以来強調されている客家の「愛国」的性格と矛盾するばかりでなく、筆者がかつて香港新界での調査で得た地域史の資料とも合致しない。少なくとも1898年の新界租借時に起きた反英闘争では、本地の村人だけではなく、客家村落の住人からも多くの参加者があり、戦死者を出していることが族譜等の資料からわかる。
- (3) この点に関しては筆者自身による考察[瀬川2003]がある。
- (4) この問題に関しては、筆者自身の考察[瀬川2001]を参照のこと。また、「土樓」の世界文化遺産登録と客家の自己認識の変遷に関する論考として、現在筆者による別稿を準備中である。
- (5) 咸豊4年(1854年)に鶴山県で始まり、近隣の開平、新会、新寧(台山)、恩平等の諸県に拡大した。双方の住民が互いに焼き討ちを行うなどして一種の「民族浄化」状態を呈した。死傷者数等は不明だが、数十万の難民を生んだとも言われる。同治6

年（1867年）には当時の広東巡撫の調停で終息するが、雷州半島、広西方面への客家系住民の移住と、新寧県の一部を赤溪庁として客家系住民のための行政区画を新設するなどの措置が採られた。

- (6) 同様の羅香林の客家像の再生産の例は枚挙に暇がないが、例えば台湾発刊のものとしては〔雨青 1985〕、中国本土発刊のものでは〔古進 1994〕、日本で刊行された一般書では〔林浩 1996〕などを見よ。
- (7) 当然ながら、こうした展開の背景には、台湾における本省人アイデンティティの構成要素としての客家アイデンティティ確立の動向も存在すると考えられる。本稿の匿名査読者の御指摘に基づき、この点を付記する。
- (8) この他に、謝重光の研究〔謝重光 1995〕なども客家形成史に関するより柔軟な考え方の先駆として数えることができる。
- (9) 筆者はその後も海南島をフィールドとして、地域社会内での相対的な自他区分概念である「客」と、エスニックグループとしての「客家」の異同について考察する論文を発表している〔瀬川 2006〕。
- (10) このように日本において発表された日本語を媒体とした客家研究書は、客家出身者の読者層を直接的なターゲットとしていない点で、より客観的かつ自由な論考が展開できる利点をもっていると考えることもできよう。

引用文献

〈和文・中文〉

飯島典子 2007

『近代客家社会の形成—「他称」と「自称」のはざままで』、東京：風響社。

雨青 1985

『客家人尋「根」』、台北：武陵出版有限公司。

王增能 1995

『客家飲食文化』、福州：福建教育出版社。

王東 1996

『客家学導論』、上海：上海人民出版社。

郭丹・張佑周 1995

『客家服飾文化』、福州：福建教育出版社。

菊池秀明 1998

『広西移民社会と太平天国』、東京：風響社。

丘権政（主編）1999

『客家与近代中国』、北京：中国華僑出版社。

古進（編）1994

『客家人』、北京：中国三峡出版社。

呉澤 1990

「建立客家学芻議」、『客家学研究』第二輯、上海：上海人民出版社。

黄火興・羅碧雲・李烈原 1991

- 『客家風情誌』、香港：中華書局。
- 黄漢民 1995
『客家土楼民居』、福州：福建教育出版社。
- 蔡麟 2005
『汀江流域の地域文化と客家—漢族の多様性と一体性に関する一考察』、東京：風響社。
- 謝重光 1995
『客家源流新探』、福州：福建教育出版社。
- 周達生 1982
「客家文化考」、『国立民族学博物館研究報告』7(1)。
- 徐正光(主編) 1991
『徘徊於族群和現實之間—客家社會文化』、台北：正中書局印行。
- 瀨川昌久 1993
『客家—華南漢族のエスニシティーとその境界』、東京：風響社。
- 瀨川昌久 1996
『族譜—華南漢族の宗族、風水、移住』、東京：風響社。
- 瀨川昌久 2001
「福建省南西部地域における客家と円型土楼」、『東北アジア研究』5。
- 瀨川昌久 2003
「客家語と客家のエスニック・バウンダリーについての再考」、塚田誠之編『中国における諸民族の移動と文化の動態』、東京：風響社。
- 瀨川昌久 2005
「客家アイデンティティ形成過程の研究—中華民国初期の著名政治家・軍人の出自をめぐる議論を中心に」、『東北アジア研究』9。
- 瀨川昌久 2006
「『客』概念と『客家』—海南島儋州・臨高地区におけるエスニシティーの重層構造」、『中国21』25。
- 詹伯慧 1981
『現代漢語方言』、武漢：湖北人民出版社。
- 戴國輝 1983
「中国人にとっての中原と周辺—自分史〈台湾・客家・華僑〉と関連づけて」、橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』、東京：山川出版。
- 高木桂蔵 1991
『客家—中国の内なる異邦人』、東京、講談社現代新書。
- 中国社会科学院・澳大利ヤ人文科学院編 1988
『中国語言地図集』、香港：朗文出版社。
- 張応斌 1996
「二—世紀的客家研究—關於客家学理論建構」、『客家研究輯刊』(嘉応大学客家学研究所) 1996(2)。
- 陳運棟 1978

- 『客家人』、台北：東門出版社。
- 陳支平 1997
『客家源流新論』、南寧：广西教育出版社。
- 中川學 1977
「中国客家史研究の新動向」、『一橋論叢』77 (4)。
- 中川學 (編) 1980
『客家論の現代的構図』、アジア経済学会。
- 房学嘉 1994
『客家研究探奥』、広州：広東高等教育出版社。
- 房学嘉 2006
『客家民俗』(林碧紅・主編『客家研究文叢・客家与梅州書系』所収)、広州：華南理工大學出版社。
- 羅美珍 1994
「談談客家方言的形成」、李逢芯主編『客家縱横—首屆客家方言學術研討會專集』、15-24 頁、龍岩：閩西客家學術研究会。
- 羅美珍・鄧曉華 1995
『客家方言』、福州：福建教育出版社。
- 羅香林 1933 [1981]
『客家研究導論』、台北：衆文圖書再版。
- 羅香林 1965 [1992]
『客家史料匯編』、台北：南天書局有限公司再販。
- 劉鎮堯 1997
『客語拼音字彙』、香港：中文大學出版社。
- 林浩 (藤村久雄・訳) 1996
『客家の原像』、東京：中公新書。

<英文>

- Blake, Fred C. 1981
Ethnic Groups and Social Change in a Chinese Market Town. University of Hawaii Press.
- Eitel, E. J. 1895
Europe in China: the History of Hongkong. London: Luzac.
- Guldin, Gregory 1994
The Saga of Anthropology in China. New York: M. E. Sharpe.
- Hashimoto, Mantaro 1973
The Hakka Dialect: a Linguistic Study of its Phonology, Syntax and Lexicon. Princeton-Cambridge Studies in Chinese Linguistics, Cambridge University Press.
- Hayes, James 1983
The Rural Community of Hong Kong: Studies and Themes. Hong Kong: Oxford Univ.

Press.

Leong Sow-Theng 1997

Migration and Ethnicity in Chinese History: Hakkas, Pengmin, and Neighbors. Stanford: Stanford University Press,

Norman, Jerry 1988

Chinese. Cambridge Language Surveys. Cambridge U. P.

〔付記〕本稿は平成16年度～平成19年度科学研究補助金・基盤研究（C）「中国、台湾、日本の学術書ならびに一般書における『客家』イメージの形成過程の研究」の成果の一部である。